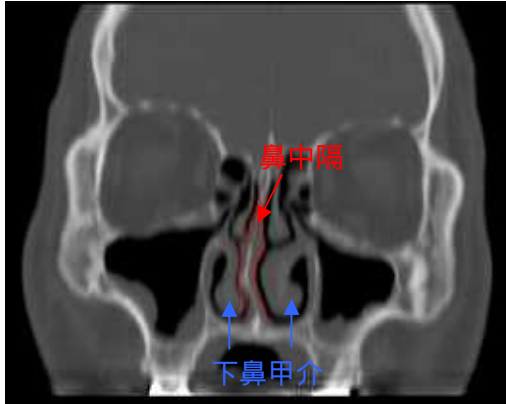


# 鼻中隔矯正術・鼻甲介切除術

## 手術の対象

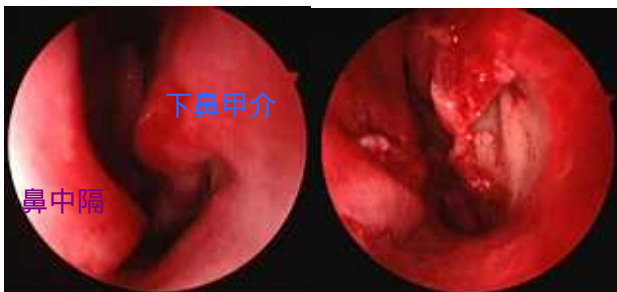
- ・鼻中隔彎曲、肥厚性鼻炎などによる鼻づまり
- ・アレルギー性鼻炎による鼻づまりの場合、難治性であれば行うことがあります。ただし、アレルギーそのものが治るわけではありません。



## 手術の目的

鼻づまりを改善するために、鼻の中の空気の通り道を狭くしているものの形を矯正します。鼻中隔矯正術、鼻甲介切除術をどのように併用するかは、個人によって変わります。

- ・鼻中隔矯正術：彎曲している鼻中隔の中の軟骨・骨を取り除き、まっすぐに矯正します。
- ・鼻甲介切除術：肥厚してしまった下鼻甲介の粘膜(場合により骨も)を切除します。



術前・術後の左鼻内(内視鏡写真)。鼻中隔が平らになり、下鼻甲介が切除されています。術後には、鼻の一番奥にある後鼻孔まで見えるようになっています。

## 手術の方法

手術は全身麻酔下に鼻内法で行います。すなわち、外から見える場所には切開をおきません。鼻の穴から手術器具を入れて行います。

- ・鼻中隔矯正術：彎曲している鼻中隔の中の軟骨・骨を取り除き、まっすぐに矯正します。鼻中隔は粘膜のみとなりますが、特に支障はありません。
- ・鼻甲介切除術：肥厚してしまった下鼻甲介の粘膜(場合により骨も)を切除します。

抗菌薬入りの軟膏をしみこませたガーゼを鼻の中に詰めて、止血します。

## 術後処置

鼻の中に詰めたガーゼを術後数日～1週間で取り除きます。全部ガーゼが取れて、それでも出血がなければ退院となりますが、ガーゼは留置したままで最短で術翌日に退院することも可能です。

## 起こりうる合併症

術後出血：術後はガーゼをつめて止血を行いますが、再出血が見られる場合があります。量が多いときには止血処置を行うことがあります。

鼻中隔血腫：鼻中隔粘膜・軟骨膜の下に血液が溜まって腫れたような状態になることがまれにあります。量が多い場合には血液を除去する処置が必要になります。

鼻中隔穿孔：術中操作、術後の血流障害のために鼻中隔粘膜に穴があいた状態となる場合があります。機能的には問題はありません。

その他、感染症、鼻及び硬口蓋の違和感、鼻閉感の残存等を伴う場合があります。

## 退院後の見通し

術後、鼻中隔・下鼻甲介の粘膜の創が完治するまでの約1ヶ月間は、かさぶたが付きやすくなります。週1回程度の処置を行う場合があります。

アレルギー性鼻炎など、鼻の粘膜に刺激が加わる状況があると、数年の単位で下鼻甲介がまた腫れてきて鼻づまりが再発することがあります。アレルギー性鼻炎の方は、薬物治療を続けたほうがいいかもしれませぬ。担当医にご相談ください。